

## パレスチナ赤新月社医療支援事業（ガザ地区）～リモート支援～

救急部看護師 藤原 真由

リモート支援期間：2020年3月10日～8月31日

派遣地：イスラエル パレスチナ自治区・ガザ

イスラエル領内にあるガザ地区では、日本赤十字社とパレスチナ赤新月社が協働し、2019年12月から医療支援事業を実施しています。当事業は、ガザ地区内にあるパレスチナ赤新月社が運営する病院を対象としており、診療プロトコルと看護プロトコルの作成を通じて、医師・看護師の医療技術と医療の質向上を目指しています。事業背景や概要の詳細は他の派遣報告や当事業の現地での活動内容の報告書もご参照ください。

（現地での活動報告 [https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/pdf/006\\_145.pdf](https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/pdf/006_145.pdf)）

前回の報告書にあるように、2020年3月、派遣中であった私は新型コロナの影響でガザとイスラエルの国境が封鎖されることになり、急遽帰国を余儀なくされることとなりました。現地には日赤要員不在となりましたが、本社およびパレスチナ赤新月社との協議の結果、リモート支援に移行することとなり、私も大阪赤十字病院救急部の医療技術支援チームの一員として引き続き事業に携わることとなりました。

実は新型コロナ感染症の流行に関係なく、私の帰国前から現地在任中にアシスタントへ、「Eメールアドレスのアクティベート」、「スキャン使用方法」、「Skypeのアカウント取得と使用方法」について説明と練習を行っていました。これは、日赤要員の私の後任が決まっておらず、一時的に日赤要員が不在の期間が生じることが予測されていたためです。加えて活動開始時から事業の継続性を考慮し、現地看護師主体で会議の準備・運営を実施するように支援していたため、現地アシスタントが事業の方針や看護プロトコル指導の要点を理解していたこと、出席簿や議事録の作成ができるようになっていたことも、実際のリモート支援では重要なポイントでした。また、看護プロトコルワーキンググループメンバーへ「プロトコル作成は現地看護師のもの、日本人が作成するものではない」、と重ね重ね説明し、現地看護師の事業への理解と協力が得られるように関わってきました。現在も一部ではありますが積極的に事業へ介入してくれている看護師もあり、リモートでの事業継続のための体制作りの一助となったと考えています。

リモート支援要員としての役割は、「リモート支援下で看護プロトコルを完成させること」と「リモート支援でのワークショップ開催方法を検討し、準備・開催すること」です。そのための活動として、「メールベースでの進捗確認」と「週に一回のリモート会議」を行っています。メールベースでは、現地から提出されたプロトコルのドラフトをベースにワードの校閲モードを使用して助言や意見交換を行い、会議ではメールで表現しにくい細かいニュ

アンスを伝えていくようにしています。

現地在任時は1週間に1個のプロトコル作成ができていたため、遠隔を考慮して2週間に1個を目標にしていました。しかし、実際に開始してみると、時差やプロトコルの修正に  
対面での助言時以上に時間がかかることや、現地での新型コロナウイルス感染症対応による業務量の増加、会議開催の制限などより、目標通りに事業は進みませんでした。そのため、3ヶ月ごとに現場の状況や事業進捗に合わせて事業計画の見直しを行い、現在は1ヶ月に1個を目標にしています。現地から提出されたドラフトにコメントを入れて、そのコメントから現  
地が修正を行い、提出後にまたコメントを入れて、の繰り返しです。この作業は、日本の病  
院内でのマニュアル作成と似ています。異なる点としては、現地で直接進捗具合を見るこ  
とができないので、どれくらい熱心に行っているのかがわかりにくいことや、現場の看護実践  
のクセや忘れやすいポイントというものを観察することができないので、アシスタントを  
通してそういった弱点を引き出していくのですが、意図が伝わらないとあら探しのように  
なってしまうので、ポイントを明確化した英語を伝えるのが難しいです。また、このような  
作業はメールだけではニュアンスが伝わりにくく、どうしてもリモート会議時にひとつひ  
とつコメントの意味確認を行うことあり、会議は2時間を超えることもしばしば  
です。しかし、このような地道な作業の繰り返しを現地の人と行うことが遠隔での  
技術移転方法の一つで、最終的に現地の人たちが納得して、かつ方法論の理解  
してもらうことが重要と心にとめ、粘り強く行っています。今回関わった人たちが  
将来現場教育の中心になって、当作業で経験したノウハウを活かしてくれたら  
良いなと思っています。



リモート会議の様子

現在までに6つの看護プロトコルが承認され、そのうち3つはリモート支援中に完成しました。現在、新たに2個のプロトコルが作成中であるのと、承認されたプロトコルを現場へ周知させるためのワークショップの準備中です。リモートでのワークショップも新たな試みであるため、現場に日赤要員が不在の中でどのように実施するか、どれほど詳細な準備が必要か全てが試行錯誤の中進めています。

世界的に新型コロナウイルス感染症の流行は遷延しており、ガザでは元々の輸入制限に加えて、医療資源の不足が懸念されています。事業にとって大きな課題ですが、現地の看護師は新型コロナウイルス感染症対応に追われる中も、事業に関わってくれています。一日も早く、安心できる日常の暮らしを取り戻せることを祈りながら、9,000km離れた地から現地の医療に貢献でき

るように、支援を継続していきたいと思  
います。

